

の徹底, 簡便・迅速な検査技術の開発, 性感染症の拡散に対する危機感の啓発, 正しいコンドーム使用法の普及のための教育キャンペーンなどの実施も強く望まれるところである。

■ 文 献

- 1) 熊本悦明, 他: 日本における性感染症サーベイランス—2002年度調査報告—。日性感染症誌 15:17-45, 2004.
- 2) 田中正利, 他: 尿路・性器感染症治療の最前線。淋菌感染症の治療に関する臨床的および基礎的検討。西日泌尿 64:324-337, 2002.
- 3) Tanaka M: Antimicrobial resistance of *Neisseria gonorrhoeae* in Japan, 1993 to 2002: Continuous increasing of ciprofloxacin-resistant isolates. Intern J Antimicrob Agents 24 S: S15-S22, 2004.
- 4) 新村真人, 川名 尚, 他: 性感染症診断・治療ガイドライン2004, 淋菌感染症。日性感染症会誌 15 (suppl):5-59, 2004.

特集

女性の健康と女性専門外来

トピックス

若年者に急増する性感染症

松田 静治¹⁾

1) まつだ せいじ / 財団法人性の健康医学財団 副理事長
順江会江東病院 顧問

エルゼビア・ジャパン

若年者に急増する性感染症

松田 静治¹⁾

1) まつだ せいじ/財団法人 性の健康医学財団 副理事長
順江会江東病院 顧問

- ◇ 性感染症はSTDまたはSTIと略称し、起炎病原微生物が多く、10種類を超える疾患がある。
- ◇ 頻度の上では性器クラミジアと淋菌の感染症が多く、以下ウイルス感染症が続く。
- ◇ 性器クラミジア感染症は男性に比べ女性に多く、特に若年者に浸透が著しい。
- ◇ 若年者の性行動には多様化が見られる。
- ◇ 若年者における性感染症の認識度が低い。今後、性教育とともに啓発の必要がある。

KeyWords

STD(STI)

性器クラミジア感染症

淋菌感染症

性器ヘルペス

尖圭コンジローマ

性感染症とは

性感染症 (sexually transmitted diseases : STD) は1975年にWHOによって提唱され、近年、STI (sexually transmitted infections)とも呼ばれている。STDは、性的接触により誰もが感染する可能性のある感染症で、生殖年齢にある男女を中心とした大きな健康問題のひとつである。

近年HIV感染をはじめ、STDの世界的増加が大きな社会的関心を招いているが、この背景には性の自由化、性風俗の変化、性行為の多様化といった風潮が根底にある。STDの抱える問題点として、病原微生物の多様化(細菌、ウイルス、原虫、真菌、寄生虫など)、無症候感染の広がりや性器外感染の増加に加えて、患者の低年齢化、つまり性行動の活発な若年層での流行が懸念されている。

わが国では1999年に施行された性感染症新法(「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」)により、従来の性病予防法で規定された性病(梅毒、淋病など)という名称がなくなり、STDの6疾患(エイズ、梅毒、性器クラミジア感染症、淋菌感染症、性器ヘルペス、尖圭コンジローマ)が感染症発生動向調査の対象となった。

STDの動向——若年者を中心とした無症候感染の増加

近年、若年者の間にSTDが急速に増えてきている。STDには10種以上の疾患があり、その病原微生物も多様化し、細菌ではクラミジア・トラコマチス、淋菌が、ウイルスではヘルペスウイルス群、パピローマウイルスなどが主流である(表1)。増

【連絡先】

〒113-0033 東京都文京区本郷3-14-10

財団法人 性の健康医学財団

表1 性感染症(STD): 病原微生物と疾患

病原微生物	疾患	女性の頻度
トレポネーマ <i>Treponema pallidum</i>	梅毒*	○
細菌 <i>Neisseria gonorrhoeae</i> <i>Haemophilus ducreyi</i> <i>Calymmatobacterium granulomatis</i> <i>Gardnerella vaginalis</i>	淋菌感染症* 軟性下疳* 鼠径肉芽種 細菌性膿症	○
クラミジア(細菌) <i>Chlamydia trachomatis</i> (L1~3) <i>Chlamydia trachomatis</i> (B~K)	鼠径リンパ肉芽種*(第四性病) 尿道炎、子宮頸管炎、骨盤内感染症など	◎
マイコプラズマ <i>Ureaplasma urealyticum</i> <i>Mycoplasma hominis</i>	尿道炎 子宮頸管炎	
ウイルス <i>Herpes simplex virus</i> (HSV) <i>Human papilloma virus</i> (HPV) <i>Molluscum contagiosum virus</i> HIV Hepatitis virus (HBV) (HAV) (HCV) HTLV-1 Cytomegalovirus (CMV) Epstein-Barr virus	性器ヘルペス 尖圭コンジローマ 陰部伝染性軟属腫 エイズ 肝炎 成人T細胞白血病 サイトメガロウイルス感染症 伝染性単核症	○ ○
原虫 <i>Trichomonas vaginalis</i> <i>Entamoeba histolytica</i>	膣トリコモナス症 アメーバ赤痢	◎
真菌 <i>Candida albicans</i>	亀頭包皮炎、外陰陰カンジダ症	○
寄生虫 <i>Phthirus pubis</i> <i>Sarcoptes scabiei</i>	毛ジラミ 疥癬	○

*: 旧来の性病、□: 日常見られるもの、◎: 頻度の高いもの、○: 比較的良好に見られるもの

えている疾患は、女性の性器クラミジア感染症と男性の淋菌感染症で、これに続きウイルスによる疾患(性器ヘルペス、尖圭コンジローマ)がある。なかでも最近では女性患者の増加が注目される一方、梅毒患者の発生は激減している。

臨床病態も比較的軽微で、目立った自覚症状がないため、感染した本人でさえ気付かないことが多く、従って適切な治療が行われなままさらに周囲に感染が広がる。これに加え、STDは性器に限局するものとする従来の概念は大きく変わり、一部全身感染症(エイズなど)としての性格を持つようになった。また、性交以外の性行為による感染(経口感染)も増加していることに注意しなければならない。淋菌やクラミジアを例にとると、感染部位、感染源が性器以外の口腔、咽頭、肛門などにも広がっている。

若年者を中心としたこのような無症候感染の増加は、いわゆるSTDのたまり場である歓楽街を中心としたものから、一般社会、家庭のなかへと感染域が広がりつつあることを示している。この背景にはSTDに対して関心がない、あるいはあまりにも無防備な若年者の存在がSTDの輪を広げ、ひ

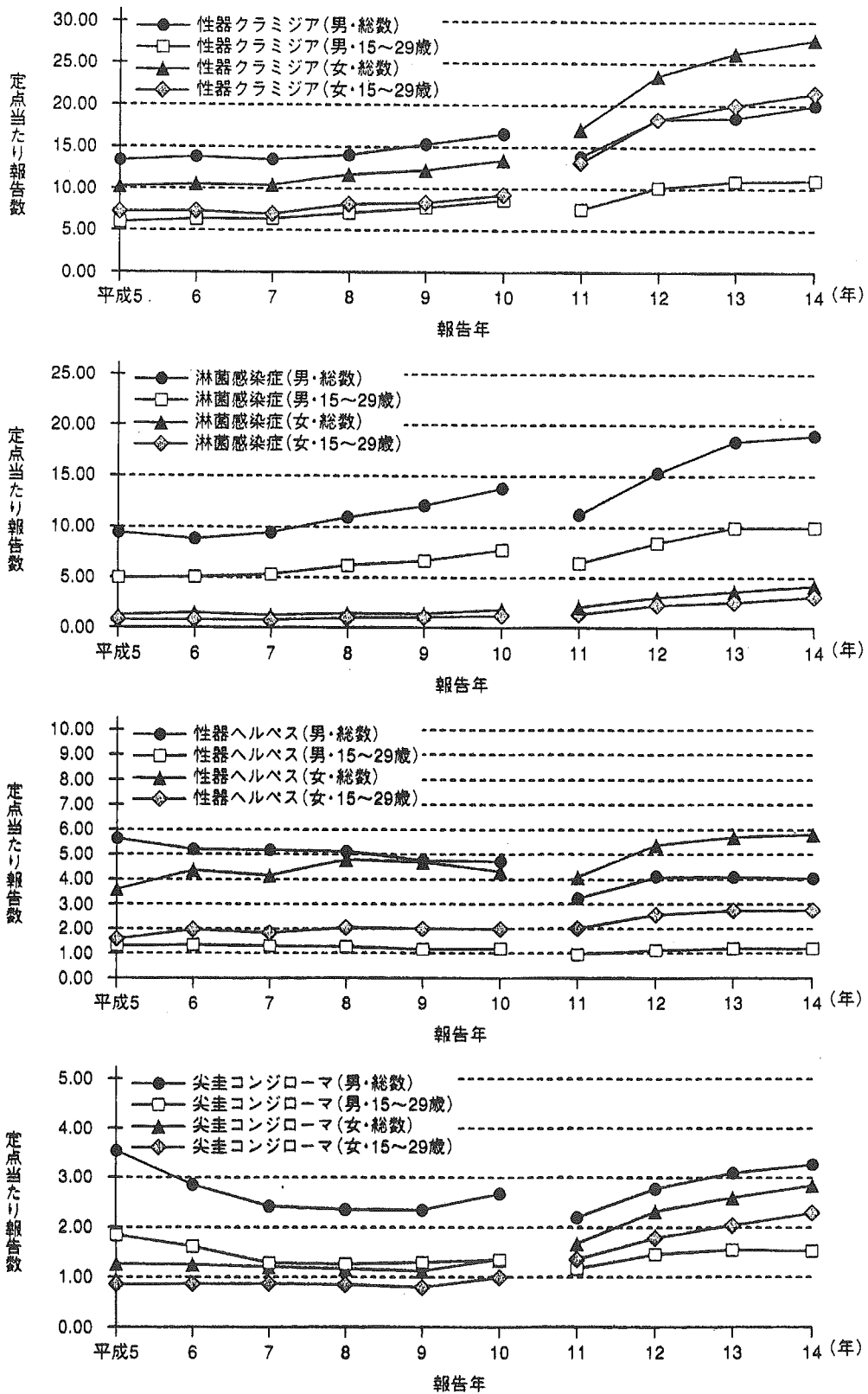
いては将来のHIV感染の爆発につながるのではな
いかと懸念されているのが現状である。

厚生労働省(以下、厚労省)の感染症発生動向調査によると、大都市を中心にSTDは年々増加傾向を示し、淋菌感染症を除き、性器クラミジア感染症、性器ヘルペスとも女性患者数が多く、罹患年齢も全性感染症で10代後半~20代前半までに増加が見られる。図1~3は厚労省感染症発生動向調査およびサーベイランス研究班¹⁾の報告による性感染症、年齢別罹患率を示したもので、STD全体では15~29歳で女性が多く、30歳を過ぎると男性が多くなる。特に15~19歳では女性/男性比は2.2~3.4倍、20~24歳では1.5~2.0倍と若い年齢層の女性にSTDの浸透の著しいことが示されている(図2、3)^{1,2)}。一方、わが国のHIV感染症の報告数を見ると、2005年春までに累積約10,000名(HIV感染者、エイズ患者)が報告されているが、このうち20歳以下の占める割合もここ数年増加している。

若年者に広がるSTDの背景 ——性行動の多様化

1990年代以降、若年者のSTDの増加に加えて、

図1 性感染症(STD)報告数の年次推移



厚生労働省定点調査 感染症サーベイランス事業年報(平成11年3月まで)、感染症発生動向調査(平成11年4月以降)

図2 全STD全国疫学調査(文献1より引用)

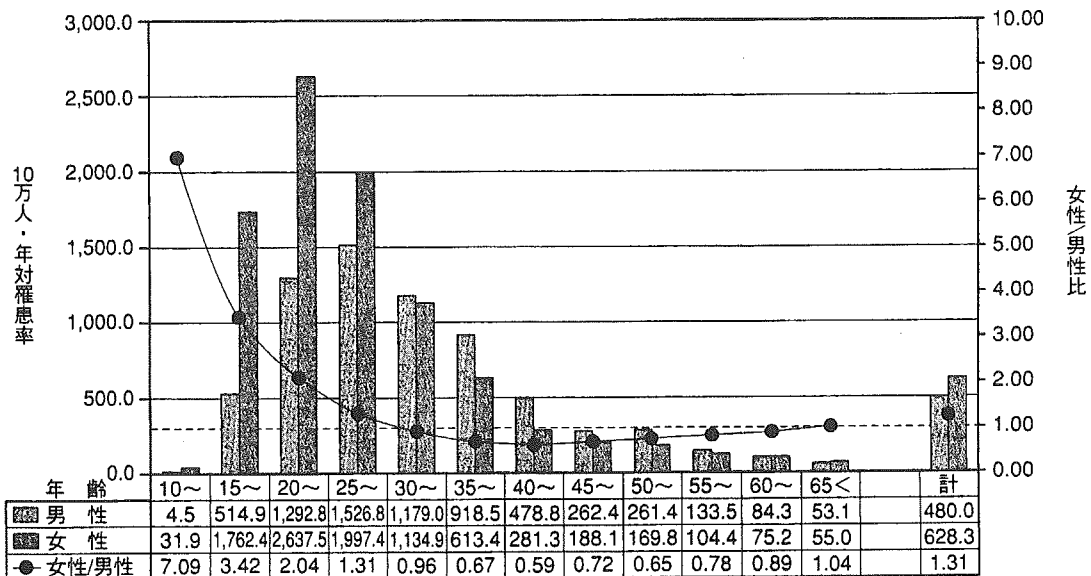
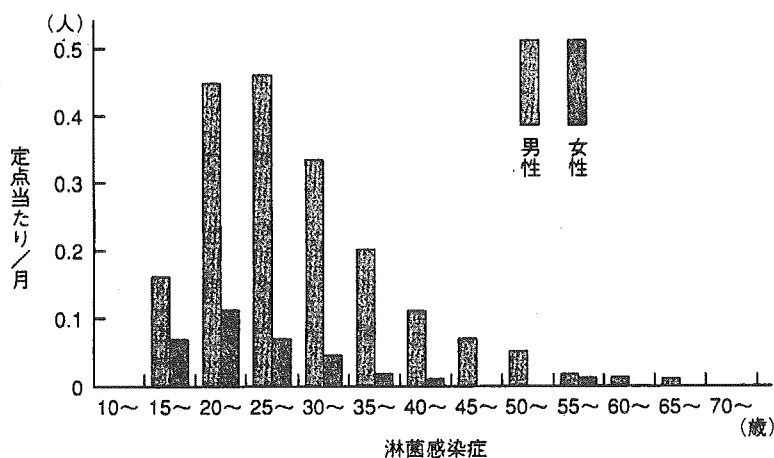
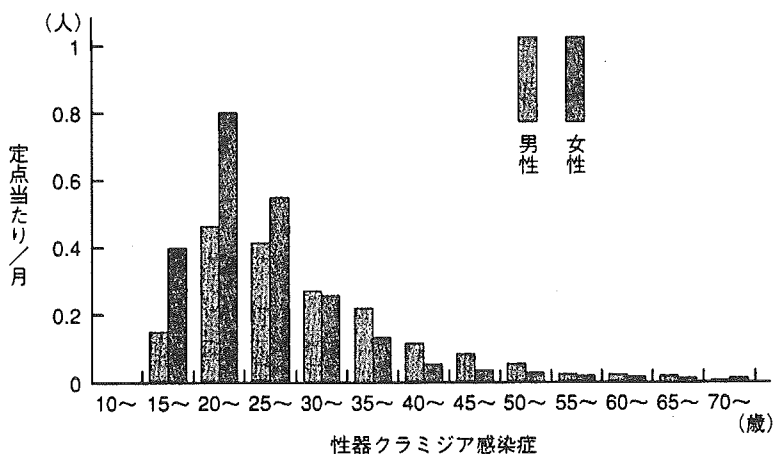


図3 性器クラミジア感染症、淋菌感染症の年齢別発生状況



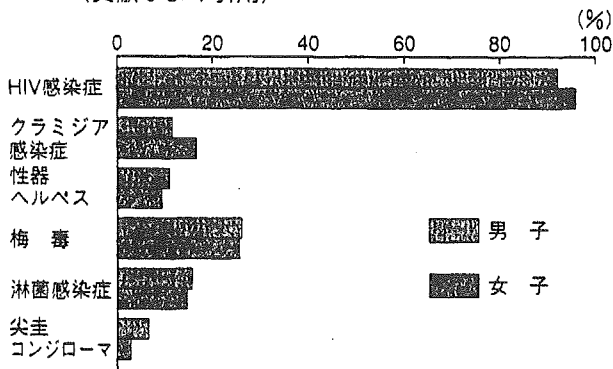
(厚生労働省 感染症発生動向調査)

10代の若者における人工妊娠中絶が増え始め、若年者の性行動がリスクの高い行動に変容してきたことがわける。一方、若年者におけるSTDの認識度は一般に低く、HIV感染症については名前をほぼ知っているものの、クラミジア、淋菌の感染症については知識を持っていない者が多く(図4)、この点ではSTD全般に関する教育、保健行政について具体的な施策が少ないと言わざるを得ない。

ただ性行動に関する研究は、近年ようやく本格的に行われるようになり、例えば東京都の性教育研究会³⁾が3年ごとに実施している調査によると、性行動の若年化が進み、高校3年生の性交経験率は1999年には男女とも40%前後に達している。大学生の調査でも、1年の入学時点で約21~24%の性交経験率が4年時点では男64%、女74%と増加している。

木原^{4,5)}によると、若年者の性行動の特徴を、①初交年齢の早期化、②セックスパートナーの数の増加、③パートナーとの性行為のタイプの多様化(経口性交など)に要約できるとされ、この年代ではセックスがカジュアル化していると指摘

図4 若年者における性感染症の認識度
(文献5より引用)

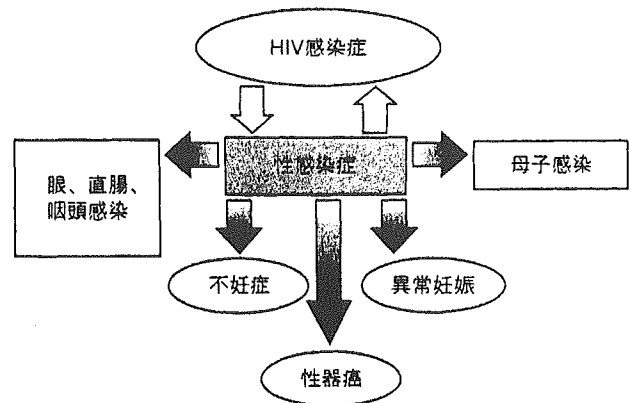


している。問題はコンドームの使用が近年減っていることで、また性的パートナーの数の多い者ほどコンドーム使用率が低いことである。つまり、性行動の若年化が進む一方でコンドーム使用の減少が見られる。欧米では性的パートナー数の多い者でコンドーム使用率が高いと報告されているが、わが国ではこれと逆の現象が起こっている。このような性行動の結果生ずるのが性行為ネットワーク(セクシャルネットワーク)であり、STD、HIV 拡散の温床となることが危惧される。

STD の制御に向けて

HIV を含む STD は複雑な病態と後遺症(不妊症、パピローマウイルスと子宮頸癌の関係など)、合併症(異常妊娠など)や母子感染の恐れを含んでいる(図5)^{1,2,6)}。この予防対策として、個人の自己管理(コンドームの使用など)と性教育の徹底が重要である。特に若年者を中心に無症状の感染者に対して、いかにして進んで検査を受けさせるかの努力が必要である。STD 制御の基本は、予防対策の重要性(健診率の向上、コンドームの適正使用、性教育)と適切な治療である。治療で問題なのは耐性淋菌感染症(ニューキノロン系薬、 β -ラクタム系薬

図5 性感染症(STD)が女性に引き起こす
さまざまな問題



耐性)の増加で、有効薬剤(セフトリアキソンナトリウムなど)の選択が重要である。

わが国では、21世紀における母子保健の国民運動計画(2001~2010年)として「健やか親子21」(厚労省ほか)という推進事業が発足し、その大きな柱のひとつに10代の性感染症罹患率の減少と、10代の人工妊娠中絶の減少を取り上げており、これからの成果が期待される。

文 献

- 1) 熊本悦明, 他: 日本における性感染症(STD) 流行の実態調査; 2000年度のSTD・センチネル・サーベイランス報告. 日本性感染症学会誌, 12: 32-67, 2001.
- 2) 松田静治: 若年層にみられるSTD. 開業医のための性感染症; STD(編集: 熊澤浄一), 南山堂, 東京, p162-170, 1999.
- 3) 東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会: 児童・生徒の性; 東京都幼・小・中・高・心障学級・養護学校の性意識・性行動に関する調査報告(1999年調査), 学校図書, 東京, 2000.
- 4) 木原雅子, 木原正博: 日本のエイズ流行の展望と性感染症予防の戦略. 日本醫事新報, 4066: 37-42, 2002.
- 5) 木原正博, 木原雅子: 現代の若者の性行動とエイズ; 性感染症流行, 性と健康, 1: 18-20, 2001.
- 6) 松田静治: 最近のSTDの動向について. 日本医師会雑誌, 131: 1545-1550, 2004.

平成17年度厚生労働科学研究費補助金新興・再興感染症研究事業
性感染症の効果的な蔓延防止に関する研究（H15-新興-6）
総括研究報告書

2006年3月31日発行

主任研究者 小野寺 昭一

連絡先 東京慈恵会医科大学医学部
〒105-8461 東京都港区西新橋3-25-8
TEL. 03-3433-1111 FAX. 03-3437-2389